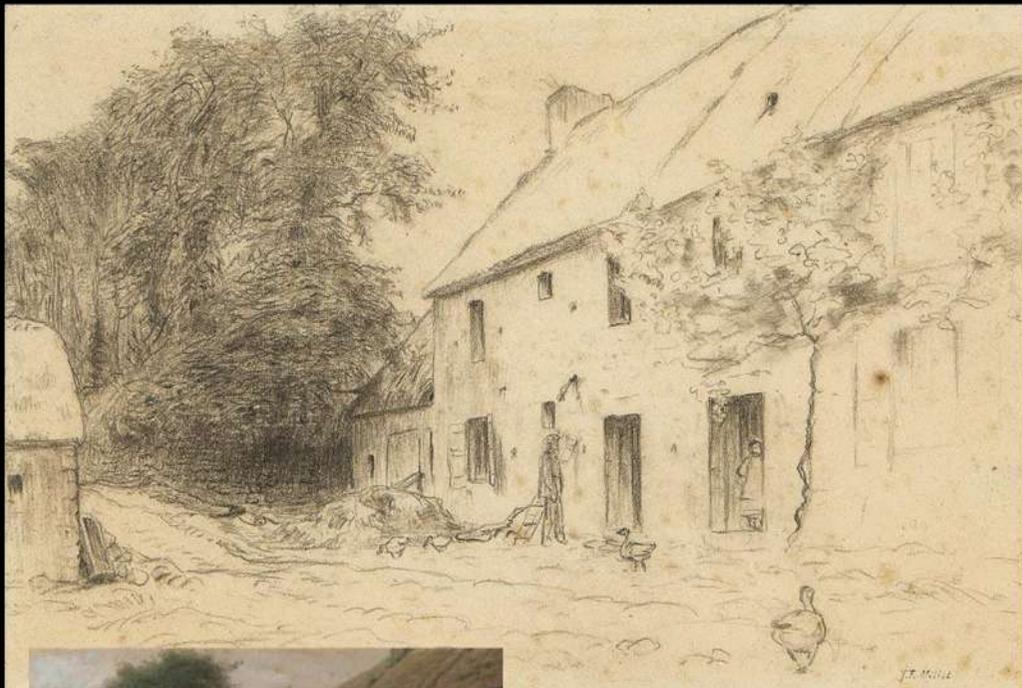


JEAN-FRANCOIS MILLET

ジャン＝フランソワ・ミレー (1814～1875)



作品名 グリュシーの農家(ミレーの生家)

種類 鉛筆作品(ドローイング)

サイズ 33.0×44.0cm 1853年作

山梨県立美術館ミレー誕生200年展出品作品 Claude Aubry 鑑定書在り。

失われた13年～ミレー生涯の傷痕～

生涯心に残り、手放さなかった作品

ミレーというと落穂拾いや種まく人などが有名ですが、実はミレーが生涯手放さなかった重要な作品が発見されました。その作品は「ミレーの生家」という鉛筆画になります。

この作品は鉛筆で描くことにより、自分の心の葛藤を冷静に現わしています。

生家の絵の左側の扉の前にミレーが立ち、右側の扉の前に女の子が立っています。

この時間差がミレーが13年間いなかった時間差であります。

ミレーは21歳で父を亡くし、9人の長男でありながら、家を捨て画家の道に走り、家を崩壊に導いた悔恨の情に苛まれながら、とうとう最愛の母や祖母に会えずじまいに故郷の家の前に佇み、この生家を想う人生を描いた作品になります。

何十年も思い描いて帰るに帰れない故郷の我が家に、やっと帰れた時には母も祖母も、もういない、この地獄の責め苦に似た悔恨

故郷の生まれた我が家だけが、この心を満たしてくれるのか、ミレーの手に握るエンピツが素描に走る家を描く、それは自分の人生を描いています。そしてこの家が自分の原点であり人生の出発点でもある。全ての始まりがこの家なのです。

この家の扉の前に立っている子が家を捨ててからの過ぎた時間を意味しています。早10年母も祖母ももういない。大きな感慨の下に生まれた作品になります。

JEAN-FRANCOIS MILLET

ジャン＝フランソワ・ミレー (1814～1875)

作品名 グリュシーの農家(ミレーの生家)



JEAN-FRANCOIS MILLET

ジャン＝フランソワ・ミレー (1814～1875)

作品名 グリュシーの農家(ミレーの生家)



JEAN-FRANCOIS MILLET

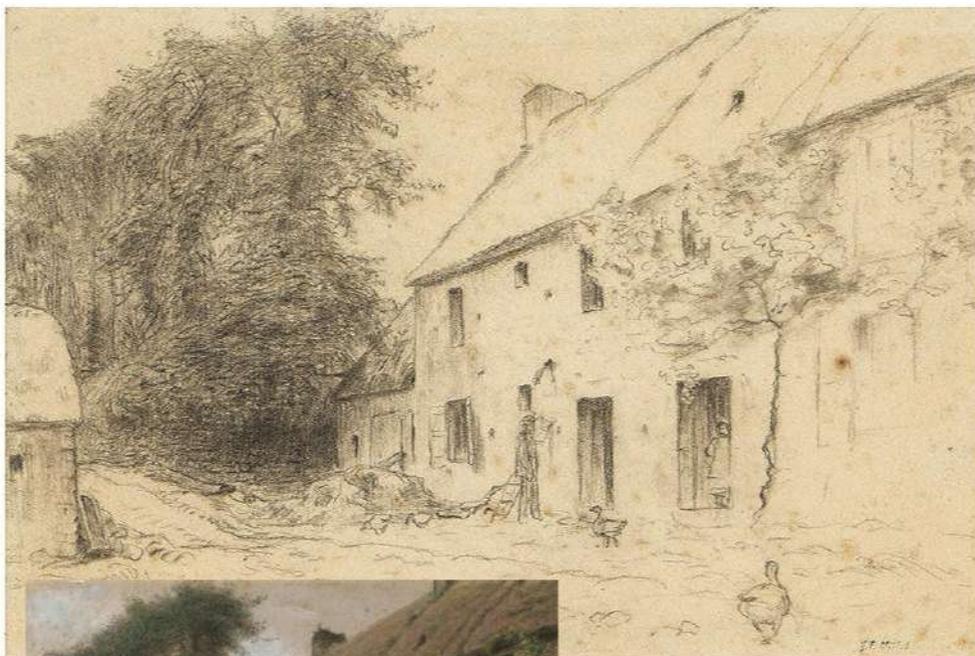
ジャン＝フランソワ・ミレー (1814～1875)

作品名 グリュシーの農家(ミレーの生家)



JEAN-FRANCOIS MILLET

ジャン＝フランソワ・ミレー (1814～1875)



略 歴

- 1814 ノルマンディ地方、グリュシーの裕福な農家に生まれる。
- 1837 ラングロワの推薦によりシェルブール市の奨学金を得てパリへ
- 1840 友人の父を描いた肖像画『ルフラン氏の肖像』がサロンに初入選
- 1846 後のバルビゾン派のトロワイヨン、ディアズ、ジャック、ルソーらと出会う。農村をテーマとした新しい作風に変化していく
- 1853 サロンに『種をまく人』を出品
- 1855 パリ万博に『接ぎ木する人』を出品し好評
- 1856 エッチング作品を制作
- 1857 サロンに『落ち穂拾い』を出品
- 1859 依頼により『晩鐘』を制作。
- 1862 パリ公会堂での美術家連合サークル展に『井戸から戻る女』を出品し評判となる
- 1864 『羊飼いの少女』がサロンで一等賞を受賞 ミレーの生家を故郷で描く。
- 1868 レジオン・ドヌール勲章を受章
- 1870 既に米国に収集家があり、デュラン＝リュエルが主要画商となる
バビルゾンにて死去。友人ルソーと墓地を隣にして埋葬

- 1875 この作品はミレーが家を出てから 1853 年 4 月母死去、約 13 年ぶりに故郷のグリュシーに戻った時に描いた作品です。
来歴 1894 年 4 月 24 日－25 日 N042 としてオテル・ドウロー。パリにてミレー未亡人の売り立て。 山梨県立美術館・誕生 200 年ミレー展出品。
Claude Aubry 鑑定書在り。

ミレーにとって、極めて重要な作品であり、ミレーの手元に置き生涯手放さなかった。未亡人の死去に際して売りに出され、初めて世に出た作品である。
この作品は特に価値は油彩以上である。

作品名 グリュシーの農家(ミレーの生家)

種類 鉛筆作品(ドローイング)

サイズ 33.0×44.0cm 1853 年作

山梨県立美術館ミレー誕生 200 年展出品作品 Claude Aubry 鑑定書在り。

JEAN-FRANCOIS MILLET

ジャン＝フランソワ・ミレー (1814～1875)



世界の文化遺産

作品名 落ち穂拾い(1855年)

種類 エッチング版 DE/LARTM12

サイズ 19×25.2cm

この作品はオルセー美術館の油彩の「落ち穂拾い」の原画です。

※ミレーの版画は、油彩やパステルに比較すると数が少ないです。20点のエッチング、6点のリトグラフ、2点のガラス版3点の木版画を制作しているにすぎません

この作品の背景にあるもの【ミレーはどうしてこの作品を描いたのか。】

元々ミレーはフランス北西部ノルマンディー地方の寒村グレヴィルのグリュシー地区に生まれた。シュルブールから海岸沿いに15キロ西に行ったアーク岬の突端にある断崖が続き、その上にある石造りの古い農家と切り立った断崖の斜面の畑と牛の放牧を世話しながら育ったのである。

そしてミレー21歳の時に一家の大黒柱の父を失ったのであるが生前の父の遺志でもあり祖母ルイズ・ジュムランの勧めもあって画家になる決心をしたのですが兄弟姉妹8人もありながら長男としての決心はミレーの心底におおきな傷痕を残しストレスをためることになるのです。そんなミレー41歳の時の作品【落穂ひろい】エッチング1855年作が完成したのです。当時はレンブラントやゴヤの版画展が行われ創作版画ブームが興り版画の芸術性がクローズアップされたところでもあります。そんな中ミレーはジャックからエッチングの制作を教わり版画の制作を始めたのです。1848年2月24日フランス2月革命までのフランスでは1830年の7月革命によるオルレアン公ルイ＝フィリップの自由王政が敷かれていたが、実際は大ブルジョアの支配によって労働者や農民の権利が無視されて、地方で農民暴動が起きるなど、人々の不満が高まっていました。さらに1846年の大凶作に端を発した穀物価格の急騰から翌1847年には恐慌が起こり、パリの人口過剰も相まって2月革命へと至る。国王は英国に亡命し、臨時政府が樹立していわゆる第二共和政が始まりました。

そして4年後第2帝政期に入ります、ギリシャローマ時代からの互助的慣習であった「落穂ひろい」は地主の麦畑の収穫を手伝う零細農民にとって、手間賃の他に一割ほど残された落穂を拾う権利があったのです。ところが第二帝政期に入った1854年、貴族階級を中心とする地主たちがこの「落穂ひろい」の権利を止めさせようとナポレオン3世に嘆願したのです。ミレーはこのことを知り神の恵みの麦穂を作る農民の崇高さを表そうと1855年に、この【エッチングの落穂ひろい作品】を創りあげたのです。結局1856年にナポレオン3世は条件付きで「落穂ひろい」を残したのです。

その条件とは、監視人を置き、女、子供だけで而も日没までという条件でした。この後に油彩の「落穂ひろい」1857年に完成して57年のサロンに出品されるのです。

作品を見ていると油彩の作品は色彩が非常にまろやかであり、ゆったりした景観になっております。その前に完成したエッチングは神経が全てに行き届いているような斑のない表情の硬い厳しい作品と対照的であります。

JEAN-FRANCOIS MILLET

ジャン＝フランソワ・ミレー (1814～1875)

作品名 落ち穂拾い(1855年)



JEAN-FRANCOIS MILLET

ジャン＝フランソワ・ミレー (1814～1875)

作品名 落ち穂拾い(1855年)



JEAN-FRANCOIS MILLET

ジャン＝フランソワ・ミレー (1814～1875)

作品名 落ち穂拾い(1855年)



JEAN-FRANCOIS MILLET

ジャン＝フランソワ・ミレー (1814~1875)



作品名 落ち穂拾い(1855年)

種類 エッチング版

サイズ 19×25.2cm

※ミレーの版画は、油彩やパステルに比較すると数が少ないです
20点のエッチング、6点のリトグラフ、2点のガラス版画、
3点の木版画を制作しているにすぎません

略 歴

- 1814 ノルマンディ地方、グリュシーの裕福な農家に生まれる。
- 1837 ラングロワの推薦によりシェルブール市の奨学金を得てパリへ
- 1840 友人の父を描いた肖像画『ルフラン氏の肖像』がサロンに初入選
- 1846 後のバルビゾン派のトロワイヨン、ディアズ、ジャック、ルソーらと出会う。農村をテーマとした新しい作風に変化していく
- 1853 サロンに『種をまく人』を出品
- 1855 パリ万博に『接ぎ木する人』を出品し好評
- 1856 エッチング作品を制作
- 1857 サロンに『落ち穂拾い』を出品
- 1859 依頼により『晩鐘』を制作。
- 1862 パリ公会堂での美術家連合サークル展に『井戸から戻る女』を出品し評判となる
- 1864 『羊飼いの少女』がサロンで一等賞を受賞
- 1868 レジオン・ドヌール勲章を受章
- 1870 既に米国に収集家があり、デュラン＝リュエルが主要画商となる
- 1875 バビルゾンにて死去。友人ルソーと墓地を隣にして埋葬

JEAN-FRANCOIS MILLET

ジャン＝フランソワ・ミレー (1814～1875)



作品名 種まく人

種類 リトグラフ

サイズ

DELART M22 ※ 希少な作品

略 歴

- 1814 ノルマンディ地方、グリュシーの裕福な農家に生まれる。
- 1837 ラングロワの推薦によりシェルブール市の奨学金を得てパリへ
- 1840 友人の父を描いた肖像画『ルフラン氏の肖像』がサロンに初入選
- 1846 後のバルビゾン派のトロワイヨン、ディアズ、ジャック、ルソーらと出会う。農村をテーマとした新しい作風に変化していく
- 1853 サロンに『種をまく人』を出品
- 1855 パリ万博に『接ぎ木する人』を出品し好評
- 1856 エッチング作品を制作
- 1857 サロンに『落ち穂拾い』を出品
- 1859 依頼により『晩鐘』を制作。
- 1862 パリ公会堂での美術家連合サークル展に『井戸から戻る女』を出品し評判となる
- 1864 『羊飼いの少女』がサロンで一等賞を受賞 ミレーの生家を故郷で描く。
- 1868 レジオン・ドヌール勲章を受章
- 1870 既に米国に収集家があり、デュラン＝リュエルが主要画商となる
バビルゾンにて死去。友人ルソーと墓地を隣にして埋葬

1875 この作品は油彩の「種まく人」が発表された翌年 1851 年に制作されたが、おそらく 1 枚だけ印刷された。その後印刷はされずミレーの死後、1879 年に数枚の試し刷りをした。1889 年 25 枚限定で印刷され、限定番号が記されている。現在この作品はほとんど残っていない。1908 年もしくはその数年前の間、ほんの少しの枚数が印刷された。非常に枚数の少ない希少な作品である。

石版原版は破棄された。

合計 20 枚に満たない位の作品しか残っていないと思われる。

正に幻の作品である。

JEAN-FRANCOIS MILLET

ジャン＝フランソワ・ミレー (1814～1875)



作品名 耕す人(1855年)

種類 エッチング・DE L'ART M13

サイズ 23.7×33.7cm

※ミレーの版画は、油彩やパステルに比較すると数が少ないです
20点のエッチング、6点のリトグラフ、2点のガラス版画、
3点の木版画を制作しているにすぎません

※

略 歴

- 1814 ノルマンディ地方、グリュシーの裕福な農家に生まれる。
- 1837 ラングロワの推薦によりシェルブール市の奨学金を得てパリへ
- 1840 友人の父を描いた肖像画『ルフラン氏の肖像』がサロンに初入選
- 1846 後のバルビゾン派のトロワイヨン、ディアズ、ジャック、ルソーらと出会う。農村をテーマとした新しい作風に変化していく
- 1853 サロンに『種をまく人』を出品
- 1855 パリ万博に『接ぎ木する人』を出品し好評
- 1856 エッチング作品を制作
- 1857 サロンに『落ち穂拾い』を出品
- 1859 依頼により『晩鐘』を制作。
- 1862 パリ公会堂での美術家連合サークル展に『井戸から戻る女』を出品し評判となる
- 1864 『羊飼いの少女』がサロンで一等賞を受賞
- 1868 レジオン・ドヌール勲章を受章
- 1870 既に米国に収集家があり、デュラン＝リュエルが主要画商となる
- 1875 バビルゾンにて死去。友人ルソーと墓地を隣にして埋葬

JEAN-FRANCOIS MILLET

ジャン＝フランソワ・ミレー (1814~1875)



作品名 肥料を取り込む農夫(1855年)

種類 エッチング・DE L'ART M11

サイズ 16.3×13.3cm

略 歴

- 1814 ノルマンディ地方、グリュシーの裕福な農家に生まれる。
- 1837 ラングロワの推薦によりシェルブール市の奨学金を得てパリへ
- 1840 友人の父を描いた肖像画『ルフラン氏の肖像』がサロンに初入選
- 1846 後のバルビゾン派のトロワイヨン、ディアズ、ジャック、ルソーらと出会う。農村をテーマとした新しい作風に変化していく
- 1853 サロンに『種をまく人』を出品
- 1855 パリ万博に『接ぎ木する人』を出品し好評
- 1856 エッチング作品を制作
- 1857 サロンに『落ち穂拾い』を出品
- 1859 依頼により『晩鐘』を制作。
- 1862 パリ公会堂での美術家連合サークル展に『井戸から戻る女』を出品し評判となる
- 1864 『羊飼いの少女』がサロンで一等賞を受賞
- 1868 レジオン・ドヌール勲章を受章
- 1870 既に米国に収集家があり、デュラン＝リュエルが主要画商となる
- 1875 バビルゾンにて死去。友人ルソーと墓地を隣にして埋葬

JEAN-FRANCOIS MILLET

ジャン＝フランソワ・ミレー (1814~1875)



作品名 水をくむ女(1862年)

種類 ガラスステロ版

サイズ 28.5×22.2cm

略 歴

- 1814 ノルマンディ地方、グリュシーの裕福な農家に生まれる。
- 1837 ラングロワの推薦によりシェルブール市の奨学金を得てパリへ
- 1840 友人の父を描いた肖像画『ルフラン氏の肖像』がサロンに初入選
- 1846 後のバルビゾン派のトロワイヨン、ディアズ、ジャック、ルソーらと出会う。農村をテーマとした新しい作風に変化していく
- 1853 サロンに『種をまく人』を出品
- 1855 パリ万博に『接ぎ木する人』を出品し好評
- 1856 エッチング作品を制作
- 1857 サロンに『落ち穂拾い』を出品
- 1859 依頼により『晩鐘』を制作。
- 1862 パリ公会堂での美術家連合サークル展に『井戸から戻る女』を出品し評判となる
- 1864 『羊飼いの少女』がサロンで一等賞を受賞
- 1868 レジオン・ドヌール勲章を受章
- 1870 既に米国に収集家があり、デュラン＝リュエルが主要画商となる
- 1875 バビルゾンにて死去。友人ルソーと墓地を隣にして埋葬

JEAN-FRANCOIS MILLET

ジャン＝フランソワ・ミレー (1814~1875)



作品名 水をくむ女(1862年)

種類 ガラスステロ版

サイズ 28.5×22.2cm

略 歴

- 1814 ノルマンディ地方、グリュシーの裕福な農家に生まれる。
- 1837 ラングロワの推薦によりシェルブール市の奨学金を得てパリへ
- 1840 友人の父を描いた肖像画『ルフラン氏の肖像』がサロンに初入選
- 1846 後のバルビゾン派のトロワイヨン、ディアズ、ジャック、ルソーらと出会う。農村をテーマとした新しい作風に変化していく
- 1853 サロンに『種をまく人』を出品
- 1855 パリ万博に『接ぎ木する人』を出品し好評
- 1856 エッチング作品を制作
- 1857 サロンに『落ち穂拾い』を出品
- 1859 依頼により『晩鐘』を制作。
- 1862 パリ公会堂での美術家連合サークル展に『井戸から戻る女』を出品し評判となる
- 1864 『羊飼いの少女』がサロンで一等賞を受賞
- 1868 レジオン・ドヌール勲章を受章
- 1870 既に米国に収集家があり、デュラン＝リュエルが主要画商となる
- 1875 バビルゾンにて死去。友人ルソーと墓地を隣にして埋葬

JEAN-FRANCOIS MILLET

ジャン＝フランソワ・ミレー (1814~1875)



作品名 畑に向かう農夫(1863 年作)

種類 エッチング

サイズ 38.5×31cm

※DE L'ART M.19

略 歴

- 1814 ノルマンディ地方、グリュシーの裕福な農家に生まれる。
- 1837 ラングロワの推薦によりシェルブール市の奨学金を得てパリへ
- 1840 友人の父を描いた肖像画『ルフラン氏の肖像』がサロンに初入選
- 1846 後のバルビゾン派のトロワイヨン、ディアズ、ジャック、ルソーらと出会う。農村をテーマとした新しい作風に変化していく
- 1853 サロンに『種をまく人』を出品
- 1855 パリ万博に『接ぎ木する人』を出品し好評
- 1856 エッチング作品を制作
- 1857 サロンに『落ち穂拾い』を出品
- 1859 依頼により『晩鐘』を制作。
- 1862 パリ公会堂での美術家連合サークル展に『井戸から戻る女』を出品し評判となる
- 1864 『羊飼いの少女』がサロンで一等賞を受賞
- 1868 レジオン・ドヌール勲章を受章
- 1870 既に米国に収集家がおおり、デュラン＝リュエルが主要画商となる
- 1875 バビルゾンにて死去。友人ルソーと墓地を隣にして埋葬